

子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察Ⅱ

—地域に向けたBFAプロジェクトはどのように展開しているか—

宮川 紗織・郡司 明子・石原加奈子・毛塚 鮎美

群馬大学教育実践研究 別刷

第36号 81～90頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察Ⅱ

—地域に向けたBFAプロジェクトはどのように展開しているか—

*宮川 紗織・*郡司 明子・**石原 加奈子・***毛塚 鮎美

*群馬大学教育学部

**株式会社サシノベルテ

***群馬大学大学院

Consideration of the Art Activity to do Life of Children more wealthily II

—How is BFA project for the area Developing?—

*Saori MIYAKAWA, *Akiko GUNJI, **Kanakano ISHIHARA, ***Ayumi KEDUKA

*Faculty of Education, Gunma University

**Corporation Sashinoberute

***Joint Graduate School of Gunma University

キーワード：アート活動・幼児教育・地域貢献

Keywords : art activities · infant education · regional contribution

(2018年10月31日受理)

1. はじめに

本稿は、幼児を対象としたアート活動（BFAプロジェクト）における2年目の展開と抽出した6つの実践について分析し報告することを目的とする。

本プロジェクトは、群馬県高崎市にある大森こども園にて実施している出張ワークショップ型アート活動である。平成29年度から子どもたちの生活、遊びをより豊かにする目的で実施してきたが、今年度は地域とのつながりも視野に入れて活動してきた。

プロジェクト名である“BFA”とは、実践のフィールドとなる大森こども園にちなみ“Big Forest of Arts”の頭文字を取った略称である。この名称にはアートの活動や体験が積み重なり、地域や社会を包摂するアートの大きな森になる、という意味を込めた。まずは、子どもたちが実感として“もの・こと・ひと・場所”といった生活世界に出会い、交わり、学ぶ過程の基盤

に「感じて、考えて、行動する」アートの活動を位置づけたい。そして、子どもたち一人ひとりの柔らかな芽が、いずれ個性ある大木へと成長し、大きな森＝コミュニティの形成につながることを願い活動を展開している。具体的には、このようなアート活動を地域（高崎市中心）に広げたいと考えている。そのため、本プロジェクトは長期的な取り組みを想定し、実践と理論の往還による継続的発展的な方向性を模索していくことに重きを置いている。

なお、準備過程と企画コンセプトに加え昨年度の最初の2回の実践については、前稿「子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察—地域に向けたBFAプロジェクトはいかに始まったか—」（『群馬大学教育実践研究』35号）において報告した。また、本論文は各項目を末尾に記した名の執筆者が担当し、全体を宮川がまとめた。

2. 昨年度との比較

昨年度と今年度の大きな違いは、実施回数の増加と参加する子どもの人数を少人数に調整したことである。昨年度は2ヶ月に1度の実施だったのに対して、今年度は1ヶ月に1度実施し、子どもたちの人数も多人数（最大70人、最小30人）から少人数（最大40人、最小11人）にすることで、より丁寧に子どもたちに関わることができるよう改善した。

※以下活動の内容を簡潔に記す。

【平成29年度】

実践は約2ヶ月に1度、4・5歳児（37・30名）を対象に実施した。実践前に学生数名を交えた検討の会を設け、素材選びを始めとする十分な題材研究や環境の想定を行った。当日は活動と同時進行でドキュメンテーションウォールの記録を残した。初回から第4回の実践までは、4歳児と5歳児とで時間を区切り、発達段階を考慮し、多少内容を変えて実施した。第5回では、園の自由時間に訪問し興味を持った子が活動できるように工夫した。

●第1回「色紙あそび」2017. 4. 21

お花紙と全身で関わり、お花紙の動きや色の重なりを楽しむ活動。（前稿に記載）

●第2回「あわぶくあそび」2017. 6. 23

着色したシャボン玉と全身で関わり、泡の表現を楽しむ活動。（前稿に記載）

●第3回「めかくしあそび」2017. 9. 19

目隠しをして歩き、身近なものを触り、そのものの感触や匂いや音を味わう活動。（詳細は後述）

●第4回「つんでつなげて広がる世界」2017. 10. 20

大量の発泡スチロールと全身で関わり、折ったり、つんだり、繋げたりする活動。

●第5回「ブロック木とあそぼっ！」2017. 12. 15

子どもの手のひらサイズの木片を満足するまで紙やすりで磨く活動。（詳細は後述）

●第6回「木の皮であそぼう！」2017. 2. 14

木の皮に触れ、クレヨンで描いた後、どんな関わり方ができるか探索する活動。（詳細は後述）

【平成30年度（10月時点）】

実践は1ヶ月に1度、4・5歳児（34・41名）を対象に実施した。昨年度の反省を踏まえ、より子どもたちの生活に密着し活動に寄り添うことができるように

実施回数を増やし、少人数での活動が実現するようにした。第3回では、初の試みとして親子ワークショップを開催し、第4・5回は5歳児を対象に継続的な制作に取り組んだ。第6回では4歳児と5歳児を共に2クラスで分け、活動時間と活動内容を変えて実施した。

●第1回「どんなかたち、できるかな？」2018. 4. 25
園舎の屋根材として使われている石に触れ、質感や温度、形や色の違いを味わう活動。（詳細は後述）

●第2回「ぷるぷるゼリー」2018. 5. 30

着色した寒天の感触や色の組み合わせを楽しむ活動。（詳細は後述）

●第3回「みんなでふんわりぬのあそび」2018. 6. 27
不織布と全身で関わり、不織布の透過性や色合い、動きや風を親子で楽しみ、体の大きさを感じる活動。（詳細は後述）

●第4回「みんなでペタペタまちづくり」2018. 7. 25
大画面に画用紙やマスキングテープで家や道を貼り付け、その画面上に絵の具の感触等を感じながらフィンガーペインティングで着彩し、街をつくる活動。

●第5回「みんなの街をピカピカさせよう」2018. 9. 12
前回作った街の上に積み木で立体的な街をつくり、そこに光を灯して、光と影を感じる活動。

●第6回「いろんな葉っぱを集めよう」2018. 10. 19
同じ種類の葉でも、色や形、大きさなどの違いがあることを感じ取り、集めたお気に入りの葉っぱを並べたり身に付けたりする活動。（宮川）

3. 実践の記録

前稿に記載できなかった昨年度の第3回の実践から今年度の第6回までの実践において、特に3つの視点を設けた。①【地域の「もの」が生きる—クリエイティブリユースの視点から—】②【子どもの「からだ」が生きる—多感覚性（身体性）を活性化する視点から—】③【親子の「つながり」が生きる—協同性を重視する視点から—】である。これらは、本プロジェクトの柱として見えてきた地域性、身体性、協同性の育成を具体化する視点である。以後、これらに関連する実践活動の詳細について紹介する。

3-1. 【地域の「もの」が生きる—クリエイティブリユースの視点から—】

廃材や余剰な「もの」に新しい価値を与え、生かす「クリエイティブリユース」¹⁾という考え方がある。「クリエイティブリユースには、廃材の調査→収集→分類・整理→開発→制作→流通・販売→啓発という大きな循環があり、そこに関わる人同士のコミュニケーションを活発にする。(略)つまり、廃材は地域の連帯を強める触媒になりうる。」²⁾ことへの期待から、地域の「もの」(素材)を活かしたアート活動を展開しようと考え、園舎建築の際に建築資材から出る廃材を素材として再利用することを試みた。

建築という営みには必ず廃棄となる「もの」や余剰な「もの」がでてくる。それらはコストをかけて廃棄処分されたり、資材置き場に放置されたりする状況が多い。それらを活用することでクリエイティブリユースの考え方を具現化する取り組みである。筆者には、廃材からインスピレーションを受けて美術作品を制作してきた経験がある。不揃いなモノの形から造形のヒントを得たり、使われてきた経緯や痕跡から作品のコンセプトが形成されたりするなど、廃材には創作意欲を大いにかきたてる魅力がある。

このような視点から幼児のアート活動に余剰の「もの」を取り入れる背景として、イタリアのレッジョ・エミリア・アプローチにおける「REMIDA (レミダ)」(クリエイティブ・リサイクル・センター)に学ぶところが大きい。³⁾「REMIDA」とは、街の工場や会社から出てくる廃棄物を専門のスタッフ(幼児教育現場でアート活動に従事していた元アトリエリスタ等)が整理・分類して、子どもたちや市民の創作活動に提供する組織である。ここには、創造的な教育を支える「もの」や「ひと」の見事な連携が成り立ち、地域の活性化に貢献している。また、幼児期から地域の産物(素材)に触れるという点でも、自らの街(地域)のことを知り、その可能性を探るという意味において価値のあることだろう。

「ブロック木とあそぼう！」

日時：2017年12月15日(金) 5歳児；12：30～14：00、4歳児；12：45～14：00

本活動は建築資材における余剰の「もの」の活用として、国産杉材のブロック(4cm立方体)を子どもに

手渡し、紙やすりで磨いていく中で、形や質感等の変化を感じてほしいという願いから取り組んだ実践である。

子どもは、木片一つを手に取り、匂い、重さ、手触りを感じる。十分に触れた後で、磨く行為に移った。子ども同士、「ほら、みて！角がこんなに丸くなったよ！」と磨いた木を差し出して、互いの木片に触れあうその中で、保育者が「どうやったらつるつるになるの？」と子どもに問いかけると子どもは「やさしくね、こするとつるつるになるよ」と自分なりのやり方を伝えていた。本活動では子ども一人ひとりが自分の木片に愛着を持ち、木を見せ合い、その変化を伝え合う姿が見られた。

たった一つの木片をひたすら磨いていく行為の中で、手を加えるごとに角がとれて次第に丸みを帯びてくる。このように、じっくりと時間をかけて対象に向き合う造形行為は「もの」への「呼びかけ—応答」による変化の過程を、子どもの「からだ」に響く手応えとして実感させてくれる。(石原・郡司)



画像1：木片と出会う



画像2：磨いた表面を見せ合う



画像3：紙やすりで木片を磨く



画像4：木の粉が出ることに気づく

「木の皮であそぼう！」

日時：2018年2月14日(金) 5歳児；12：30～14：00、4歳児；12：45～14：00

本活動は、建築資材の加工段階で出る木の皮を用い、木の皮に触れ、繋げる・積む・裂く・描くといった様々な行為を通して、子ども一人ひとりが木の皮で思いのままに表現する活動である。

この活動では等身大以上の大きな皮を持って、体全

体で造形的な探究がなされていた。まず、木の皮を持ち、その大きさに喜ぶ。さらに、木の皮を触ってみてゴツゴツした表面とツルツルした裏面に気づく。そしてたくさん木の皮を集めたり、木の皮を踏んで感触を味わったり、素材との出会いを子ども一人ひとりが独自に楽しんでいた。そこから各々の造形活動の探索が広がっていった。友達同士で「ここは家で、そっちは焚火ね!」とイメージを伝え合うグループがあれば、一つの木の皮の表面をクレヨンでなぞっている活動が見られた。

また、園庭の広さを利用して、一つ一つ木の皮を置いていく子どもがいた。一度置いた木の皮を何度も調整する姿も見られ、その子は「線路を作っているんだよ」とダイナミックに園庭に木で描くという行為を続けていた。このときの園庭には、木の皮に触れながら、いかに自分のイメージを実現するか、という問いに基づき試行錯誤を繰り返す子どもたちの姿があった。



画像5：木の皮と出会う



画像6：木の皮をひたすら裂く



画像7：足でふんだ感触を味わう



画像8：友達の作品を鑑賞しあう

に並べる等、様々な造形活動が見られた。その中でA君が石を使って地面を掘り始めた。彼が掘ることに夢中になると、窪みができてきた。窪みをA君が手で整え、窪みの上に石を置いた。「これね、橋を作っているんだよ。」と言って、橋を架けるために窪みは広がっていき、川のようにつながっていった。

子どもは造形行為を繰り返す中で、ふと自身の行為一結果に納得する瞬間がある。その瞬間、さらなる行為が繰り返され、次のステージ(友達とつながる等)に移行していく感覚があった。

活動後に作品(子どもたちの造形行為の集積)を展示する期間を設けた。外遊びの際に、子どもが友達に「あれ、ぼくがつくったんだよ」と紹介する場面や、保育者も子どもの作品に興味を示して、対話が生まれる場面もあり、園の日常の中で、互いの作品を見合い楽しむことができていた。(石原)



画像9：石の屋根材と出会う



画像10：石に土をかけて擦る



画像11：おうち(5歳児の作品)



画像12：お料理(4歳児の作品)

3-2. 【子どもの「からだ」が生きる—多感覚性(身体性)を活性化する視点から—】

本プロジェクトは、始動の際から「子どもの生活をより豊かにする」=子どもの「からだ」が生きる(生き生きする)ことを主軸にしたアート活動を行ってきた。具体的には多感覚性(身体性)を活性化する活動内容について検討を重ねてきたところである。

あらためて、多感覚性とは何か。秋田(2003)は北イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育の特徴として、空間環境の原理を構成する理念を、①全体としての柔軟性、②関係性、③浸透性、④多感覚性、⑤操

「どんなかたち、できるかな?」

日時：2018年4月25(水) 5歳児；12：30～13：00、
4歳児；13：15～14：00

本活動は石の屋根材の質感等の特徴を味わい、様々な組み合わせや繋げる・並べる等の活動を通して構成する面白さ、楽しさを感じる活動である。

子どもたちは石に触れ、「つめたいね」「いろんな形があるね」とスレート石材から感じたことを言葉にしていた。石材を重ねて家を作る、園庭にある窪みに石材を多く運び積み上げる、泥団子を作ってそれを石材

作可能性、⑥共同体、⑦生成、⑧物語、⑨豊かな規則性の9点にまとめている。⁴⁾ここで言われている空間環境の多感覚性とは「視覚・聴覚だけではなく、触覚・味覚・嗅覚などの感覚も同等の価値が認められる環境」⁵⁾である。つまり、普段は無意識の水面下にあるような感覚を積極的に働かせるような環境（実践）を重視することである。さらに、多感覚性は、自己受容性の感覚と言われる身体における「気づき」、すなわち、運動感覚（動く／止まる）、身体の構えや姿勢、筋感覚（筋肉の緊張と弛緩）等も含め、総合的かつ統合的な身体性として捉えていきたい。

以下に紹介する2つの実践は、非日常的な体験を通して、普段意識されない嗅覚や触覚など視聴覚以外の感覚を意識してみる活動である。多感覚を通して外界にアプローチする子どもたちの言葉やしぐさには、普段ともに過ごしている保育者でさえ驚く場面があった。

「めかくしあそび」

日時：2017年9月19日（金）4歳児；9：40～10：20、5歳児；10：40～11：30

本活動はアイマスクをして友達とペアになって歩いたり、身近なものを視覚以外の感覚で捉えたりすることを通して日常とは違った感覚を楽しむ活動である。

活動中、子どもたちは「見えない」感覚を楽しみ、自分なりに触り心地や匂いを色や形で表していた。

例えば、木のおもちゃの匂いを表す際にクレヨン1本1本の匂いを丁寧に嗅ぎ、色を決定していく子、自分が描いた絵の匂いを嗅ぎ「いい匂い。」と言って嬉しそうに絵に頬ずりする子、自分の触った綿に「羊のふわふわ」と名付けて描いていた子など、個々の子どもが持つ感性の豊かさや世界観に驚かされた。

活動後、現場の保育者を対象に実施したアンケートでは、「窓ガラスはあたたかい、柱は冷たい等普段は気づかない発見に驚く子もいた。」「目隠しをして物を触ったとき、触る、握る、匂いを嗅ぐなど色々と探る姿が見られた。」という回答から、このような活動は保育者にとっても、子どもたちにとっても新鮮な活動になったことが分かる。また、「触覚や嗅覚から得た思いを言葉にすることは日常的に繰り返し行っていききたいことだと感じた。」や「視覚を少しの時間遮ることで、子どもたちは全く異なった環境を体感し、視覚以外の感覚を育む経験ができるのだなと思った。」と

いった回答からは、子どもたちが様々な感覚を生かして物を探ったり、表現したりする活動の価値を保育者とも共有することができたといえるだろう。



画像13：目隠しをして歩く



画像14：目隠しをしてものを触る



画像15：触った感覚を絵で表現する



画像16：5歳児の作品

「ぷるぷるゼリー」

日時：2018年5月30日（水）4歳児；10：45～11：30、5歳児；13：00～13：45

本活動は色付き寒天の触り心地を楽しみながら、好きなように入れ物（金魚袋）に入れて吊るし、同時に見ることも楽しむ活動である。

具体的な子どもたちの姿として、寒天の触り心地を表す際に「ぷるぷるじゃん！」「くにくにくにゃ～」といったオノマトペを使ったり、金魚袋に入れた寒天に対し「イルカの水槽の匂いがする！」と自分自身の経験に基づいて香りを名付けたり、窓際に並んだ金魚袋を見て「恐竜の歯みたい」という見立てをしたり……寒天という、子どもたちにとって新鮮な素材との出会いによって、「感動をだれかに伝えたい」というモチベーションにも繋がったのか、自分なりの言葉で驚いたこと、感じたことなどを子どもたち同士で共有している様子が見られた。

また、「太陽に透かして見ると色が変わる！」といったように自然との関係性において寒天という素材の美しさを発見し楽しむ様子も見られ、寒天という素材を通して、想像力を働かせたり、周囲の環境に目を向けたりしながら体全体で活動を楽しんでいる様子が見られた。（毛塚）



画像17：ぷるぷるゼリーと出会う



画像18：触り心地を楽しむ



画像19：お気に入りを集める



画像20：友達の作品を鑑賞する

3-3. 【親子の「つながり」が生きる一関係性を活性化する視点から】

昨年度は子どもたちとの活動が中心であり、保護者に直接アート活動の内容に触れてもらう機会がなかった。そこで、今年度は園の自由参観日に合わせて親子で一緒に楽しめるアート活動を実施した。

実践の場となる「こども園」は、保護者が共に就労

している家庭も多く、日頃、子どもとのゆったりとした時間や十分なスキンシップも限られているであろうことを思い、親子の「つながり」が身体レベルで実感できるような活動内容にしたいと検討を重ね、次のような実践を行うことにした。




なお、この実践は、親子参加という点で本プロジェクトにおける初の試みであり、その後のアンケート調査の結果等を分析することから、他の実践紹介とは異なる形式で時系列に沿って活動内容の詳細を示したい。

「みんなでふんわりぬのあそび」

日時：2018年6月27日（水）4歳児とその保護者；13：30～14：10、5歳児とその保護者；14：30～15：10

本活動は、親子での不織布の活動を通して、不織布の色の重なりや透ける感じ、柔軟な動きを全身で感じ、楽しみながら、自分の身体の大きさを実感するものである。子どもの体サイズの不織布と親子共に全身で関わり、その後、子どもの体の大きさに沿って型抜きをする。それを体育館サイズの大きな布に貼り、波を作る、中に入る等の活動を通して、動的な不織布の感じ、色合い、透過性、風などを感じる。

表1 「みんなでふんわりぬのあそび」の実践（5歳児とその保護者の活動の様子）

主な活動	子どもの活動(行為・発話)	省察
<ul style="list-style-type: none"> 好きな色の不織布を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者と一緒に円になって話を聞く。 好きな色の不織布を1枚取りに行く。 不織布をひらひらさせたり、身にまもってみたりして、不織布と自由に関わる。 「大きい」「マント」 不織布を顔にかざして、保護者と布越しに見つめ合う 「見えない！」「水色の世界」 	<ul style="list-style-type: none"> 好きな色の不織布に向かって走り出す。 どの色にしようか迷って、あちこち歩いている子もいる。 ファシリテーターの声かけより先に不織布と関わり出す。 保護者の表情を見ようと布越しに一生懸命見ている。 保護者も子どもの表情を見ようと顔を近づけたり、布を子どもにかけたりして関わる。 抱っこやおんぶ、抱きつくなど、保護者と協力しながら、どうにかして乗れるように工夫している様子。
<ul style="list-style-type: none"> 不織布をどんどん半分に分けていき親子でその上に立つ 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者と一緒に不織布の上に乗ってみる。半分の大きさに折って乗ってみる。 「乗れるよー」「全然平気だよ！」 さらに半分、またその半分にしてどんどん小さくして上に乗ってみる。 「きゃー」「すごーい」「えー！！」「みてみて！」「ここに乗れたよ！！」 	<ul style="list-style-type: none"> どんなポーズで寝転がるか相談している様子。 なぞられるたびに笑っている子どもを見て、保護者も楽しそうに笑っている。
<ul style="list-style-type: none"> 不織布の上に寝転がり、自分の体の型どりを保護者にしてもらおう 	<ul style="list-style-type: none"> 不織布の上に寝転がり、自分の体のラインを保護者に色鉛筆でなぞってもらう 「くすぐったいよ」「くすぐったいの？(保護者)」「あははは」「きゃははは」「こんどはこっちをかくよ(保護者)」 	

<ul style="list-style-type: none"> ・保護者と協力しながら、ハサミで自分の分身を切る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハサミで不織布を切り、自分の体の型、分身を作る。 ・「シャキーン」「まっすぐなら切れる」「今手が切れるところだったよー」「ちょっと大変だな」「ここなら切れるんじゃない?」「ママどこ切ればいい?」「切るのはいいんだけど、手が大変」「けっこう時間がかかる」「切れたよー!」 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者と協力しながら、自分でも切れそうなところは自分で切ったり、難しいところも果敢に挑戦したりする子もいる。 ・真剣な表情で切っている。 ・切れた子は、不織布をもって自分と合わせてみたり、もう一度切った不織布の上に寝て、形を確認している様子。
<ul style="list-style-type: none"> ・つなぎ合わせた大きな不織布の上に、分身を貼る 	<ul style="list-style-type: none"> ・「えー?」「きゃー!」「なにこれ!?!」「わー!」「大きい!」体育館の真ん中に大きな布が登場し、飛び跳ねたり、大きさに目を奪われたりする。 ・自分の分身を大きな不織布の上に貼る「ここに貼る」「どこがいいかな……」「○○ちゃんのとりにする」 	<ul style="list-style-type: none"> ・いきなり登場した大きな不織布に驚いている様子。 ・身を乗り出して、不織布に近づこうとする子もいる。 ・不織布の上を歩いてどこに分身を貼ろうか考えたり、上を歩くことを楽しんでいたりする子もいる。
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで大きな不織布をもち、大小様々な波を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・まずはみんなで大きな不織布を持ち上げる。 ・「おー」「わあー」 ・下に空間ができた瞬間不織布の下に入り、ジャンプして不織布をタッチしようとする。 ・外に出てみんなですばやく小さい波をつくる。その後大きな波をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな不織布を持ったときの手応え、重さを感じている様子や、全身をつかって(膝をまげたり腕を上伸ばしたり)波をつくらうとしている様子。
<ul style="list-style-type: none"> ・大きな不織布の下に入る 	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは子どもたちだけで不織布の下に入る。 ・「きゃー」「きゃー」 ・保護者も一緒に不織布の下に入る。 ・「きゃー」「わー!」 ・「きれい!」「いるよー(分身が)」 	<ul style="list-style-type: none"> ・何も言わなくても体が勝手に不織布の下にいってしまう。自分の体、心の赴くまま、不織布の下の不思議な空間を楽しんでいる様子。 ・自分や友達の分身を見つけて、タッチしようとしている子もいる。
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで床の上に寝転がり、不織布の風を感じる 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体育館の床に寝転がり、大きな不織布が頭上を通り抜けていく瞬間を感じる。 ・「きれー!」「きゃー」「涼しい～」 ・「もう1回!」「もっとやりたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・不織布の色の移り変わりや、風を心地よさそうに感じている様子。 ・手を伸ばして風を掴もうとしている様子。

4. 実践の振り返り

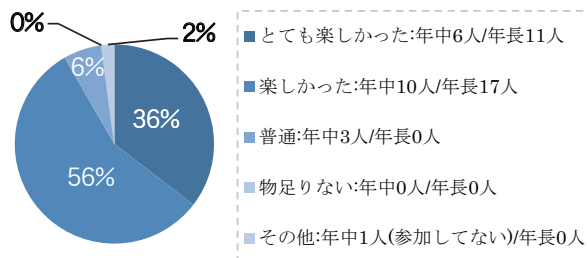
4-1. 保護者アンケートとその分析

前述の第3回親子ワークショップの後日、任意で保護者アンケートを行った(7月4日に配布し7月13日までに回収箱に提出)。回答は約7割の48名(年中20名、年長28名)。質問項目は以下の4つである。

[Q1] お子さんのクラスについて [選択式回答: 年中・年長]、[Q2] 今回お子さんと一緒にアート活動に参加した感想 [選択式回答: とても楽しかった・楽しかった・普通・物足りない・その他(自由記述欄)]、[Q3] これまでにご家庭でお子さんと園でのアート活動について話題になったことがありますか [選択式回答: ある(あると答えた方のみ、お子さん

と話した内容についての自由記述欄)・ない]、[Q4]今後どのようなアート活動があると嬉しいですか。[自由記述]。自由記述欄を設けたQ2～Q4についてその内容の分析を試みた。

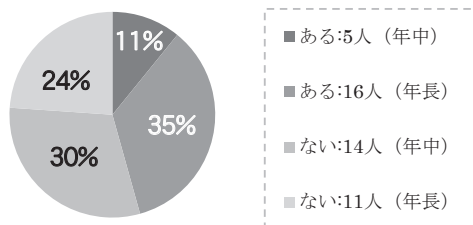
グラフ2 Q2. 今回お子さんと一緒にアート活動に参加した感想



回収したアンケート48枚の内Q2の自由記述欄に記入があったのは42枚であった。記述内容から以下の5つの項目を抽出し、各項目に当てはまる内容の記述をした人数は次の結果となった。(自由記述のため1枚で複数の内容が記入されている場合もある)

①子どもの様子：25人、②親子で一緒に：11人、③非日常：6人、④協同性：2人、⑤その他：4人

グラフ3 Q3. これまでにご家庭でお子さんと園でのアート活動について話題になったことがありますか



回収したアンケート48枚の内Q4(今後のアート活動への期待)の自由記述欄に記入があったのは26枚であった。記述内容から以下の8つの項目を抽出し、各項目に当てはまる内容の記述をした人数は次の結果となった。(自由記述のため1枚で複数の内容が記入されている場合もある)

①非日常：9人、②色彩：7人、③協同性：4人、⑤素材：4人、⑥心の働き：4人、⑦身体性：2人、⑧作品化：2人、⑨その他：4人

今回の親子ワークショップが、子どもたちが普段園でどのようなことをしているかを知るだけでなく、子どもと同じ目線に立ち空間を共有する貴重な機会になったといえる。アンケート結果より、Q2では子どもの楽しそうな様子を理由に挙げている保護者が多い

のに対して、Q4では家ではできない非日常性や色を感じることができる、友達との協同活動や素材に関して等のより活動内容の詳細に関して要望があることが明らかになった。これは、アート活動の内容に対しても強い関心を持っている保護者が一定数いることを示している。

さらに、昨年度から継続してきたことによって、年長の子どもたちは家でアート活動の話をしている割合が高いことが分かった。持ち帰ったものを大事にしている様子や話している子どもの表情から、アート活動が子どもにとって楽しい時間であるという認識に至っていることは、保護者との信頼関係を結び、地域に根ざしていくための第一歩である。

しかし、本プロジェクトがただ楽しい活動という認識で完結してしまうのは本意ではない。子どもたちがアート活動を通して何を行い、何を感じ、何を学んでいるのかを言語化すると共に可視化して保護者や地域に向けて発信していきたいと考える。今回の親子ワークショップはその第一段階として、アート活動の可能性を保護者と共有する機会になったと言えよう。(宮川)

4-2. BFAプロジェクト運営スタッフの感想

本プロジェクトに関わり、幼児には様々なものに触れてみたい、遊んでみたいという欲求が強くあると感じた。日常ではその欲求を制限されることも多いだろう。本プロジェクトは、幼児が様々な素材と触れ合い、欲求を生かせる場としてあり、それが幼児の好奇心や感受性を伸ばしていると感じている。「どんなかたち、できるかな？」で子どもたちは、積み木のようにして家を作る、新幹線のように動かすなどしていた。その中で、石と石が衝突する音を楽しんでいた、重い、冷たいなどの声があがっていたり、五感を通じて素材を味わっている様子も見られた。そして、「みんなでペタペタまちづくり」と「みんなの街をピカピカさせよう」では、前回参加した「どんなかたち、できるかな？」の時より子どもの発言が豊かになり素材への関わりも深まっているように感じた。着色した街に、木片で建物を作る時には、木片の香りを嗅いで身近な匂いと比べていたり、形や色の違いを活かして建物を作っていたりしていた。ライトを点灯させる場面では、光と絵の具の色と積み木による影などが相まった幻想的な世界をじっくりと味わっていた。目

を輝かせてライトが灯ったまちを眺める姿が見られ、本活動では特に、自分自身が作り出した作品を鑑賞するところまで充実して行えたと思う。(学部4年生・大滝)

子どもたちは、何をどのように学んでいくのだろうか。また、私たちは、どのような学びの環境(機会)を提供すれば良いのだろうか。

本プロジェクトは子どもたちが見ている豊かな世界に、対話を通して触れることができる時間であると、活動するたびに実感する。子どもたちは自己と外界との対話を独自の言葉(造形言語を含む)で私たちに伝えてくれる。そのときの豊かな言葉や世界観は、日々無機質なものと対峙している筆者に驚きや気づき、感動をもたらしてくれる。自分自身が見ている世界に没頭し、まっすぐに向き合える子どもたちに羨ましささえ感じる。また、大人が無意識のうちに縛られている常識を超えて、子どもたち特有の大胆な言動や発見に、それまでは不安な要素であった予測できないこと(即興性や偶然性)に対してポジティブに向き合う姿勢も獲得しつつあるように感じる。

約2年、子どもたちと共に様々な実践をしていくにつれて、子どもたちがどう学ぶか、どう成長していくかを捉えること以上に、私たちが子どもから驚かされたり、気づかされたりすることの方が多かった。子どもたちに何かを教える、施すというスタンスではなく、子どもたちが自身の豊かな言葉や世界観を発揮できるように、子どもそのものの在り方を保障し、環境を整えていくことを大切にしながら本プロジェクトを続けていきたい。(毛塚)

本プロジェクト始動時より、筆者はコーディネーターの宮川とともに活動を展開し、運営委員として園とBFAプロジェクトをつなぐ役割を担ってきた。実施に向かうまでの大きな流れは、活動案について宮川と話し合いを重ね、案がまとまった時点で、園に訪問して活動の趣旨を園に伝える。それから園との最終調整を行い、実践に至る。月に2、3回園を訪問する中で、子どもたち自身から「次のアートの日は何するの?」と聞かれることが増えていった。アート活動の実施回数を重ねる毎に子どもの期待値が上がってきているのを直接感じる事ができた。また、園側の意識

としても日常生活の一環として「アート活動の日」が定着し、空き教室をアトリエとして使用する許可がおりた。

今までのアート活動を振り返ると多種多様な活動を行ってきたと改めて感じた。活動内容を考える際に、提供する私たちが「子どもがこれで遊んだらどんな景色が見えるかな。」と好奇心が掻き立てられる題材であることを重要としている。提供する私たちがワクワクするような活動は子どもたちが探索活動に没頭するイメージも広がりやすい。建築資材から自然素材、様々な素材に触れ、子どもが造形的な探索活動をすることで、考え方や行動に変化が生まれてくる。この2年の間でも子どもの言葉や行為の変化を感じる場面が幾度もあった。「みんなの街をピカピカさせよう」において様々な種類の木のブロックを渡した際に、自ら匂いを嗅ぎ、木と木をぶつけ音を鳴らし、重さの違いなどを発見していた。1年前はこのような自発的な行為は見られなかったので、驚くと共に経験を積み重ねることの重要性を実感した。今後は活動内容における質の向上、人手不足、予算の関係等課題は多いが、独自の運営の形を築いていきたい。(石原)

4-3. 実践を通じた考察

今年度の成果は、実践回数を重ねたことにより教材研究が進み、活動内容にも広がりを持たせることができたことである。前述した地域の資材=建築資源から出る余剰の「もの」をアート活動の素材とする試みでは、普段は見過ごしているものを実際に手に取ることによって、それが身近なものへと変容し、親しみを持つ子どもの姿があった。このような経験は、生活における「もの」をみる目が変わる契機となる。また、親子ワークショップを実施したことにより、保護者が「アート活動」の実際にふれ、価値の共有、理解を深めることに繋がり、本プロジェクトが地域に根ざしていく糸口となったはずである。

さらに、アート活動に対する子どもの期待も高まっている。園長、副園長を交えた昨年度の活動全体の振り返りでは、「卒園に際して印象深いことを毎年子どもたちに聞いているが今年は『アート活動』という返答があった」という。特に、いわゆる「いい子」でいることにプレッシャーを抱えている子どもがそう返答していたという話があり、「～あらねばならない」と

いう価値から解放され、自身で（共に）探索し続けることが保障されている時空間の重要性を示唆している。

課題としては、実践前の試しの活動（教材研究）には力を入れてきたが、スタッフ同士はもちろん、保育者を含めたふり返りの時間を設けることが挙げられる。ドキュメントウォールの作成を通じて、実践を可視化し、子ども、保育者や保護者への理解を促すところまでは行っているが、実践そのものの意味や価値をじっくりとふり返ったり、子どものつぶやきや行為から省察したりする機会に乏しい。

上記に関連して、さらに、子どものアート活動の実際に誠実に耳を傾け、根源的な問いに対する対話を通じ、子どものアート活動本来の豊かさを引き出し、周囲の大人が共有し合う工夫も必要である。現状ではまだ、実践の提供ということに終始し、自分たちが行っていることを客観的に意味づけるところまでに至っていない。

あらためて、論文執筆や研究発表等の機会を通じ、スタッフ内及び園の保育者を交えた学習の機会を重視していきたい。そのなかで、「地域に向けた」という視座から地域における「もの・人・こと・場所」の活用と地域に広がるアート活動のあり方を模索していきたい。（宮川・郡司）

5. おわりに

昨年度に引き続き、地域に向けて幼児のアート活動を推進するBFAプロジェクトの実践報告を中心に本論を展開してきた。ここで改めて特筆すべきは、実践回数増加による教材研究の深化と、その方向性の共有である。①地域の「もの」が生きる、②子どもの「からだ」が生きる、③親子の「つながり」が生きる、という三つの方向性において教材研究を進め、実際に具体的な成果と課題を得る（アンケート調査より）ことができた。「アート活動は、なかなか親子で体験できる機会がない中で、とても楽しく体も使って活動ができたのでよかった。つくるだけでなく、見てもキレイ

でとてもいい活動だった。」という保護者アンケートの記述にもあるように、日頃、自明のものごとである「地域」「からだ」「親子」を巡る関係性に光を当て、改めて意識をしたり、立ち止まって考えたりするきっかけをアート活動がもたらしていると言えよう。

実際の実践は、群馬大学の美術教育研究室を修了した宮川（保育系専門学校非常勤講師）と彫刻研究室を卒業した石原（児童指導員）が中心となり、美術教育専修の院生や学部生を巻き込みながら、事前の打ち合わせ、教材研究、細やかな準備に勤しむことで成立している。地域に向けたアート活動という点では、真に地域性を生かすような活動内容の充実、その広がりにはまだまだ課題が山積している。しかし、地域で美術教育を学ぶ人材が地域の若い力として、未来に向かう子どもたちを中心に据えた地域／アートプロジェクトに携わり、共に創造的な社会を目指す（幼児期のアート活動はその素地を形成する）、それ自体が“アートの活動”だと言えるだろう。

最後に、認知心理学を専門とする佐伯胖が、アートを通じた教育を重視するレッジョ・エミリアのアプローチに触れて説いた言葉を紹介し、本稿を閉じたい。「美しいものとして世界を『見る』。美しくなる可能性を世界に『見る』。そして、少しの工夫しただいで、世界を美しく『する』。」⁶⁾このような意識（アートの志向／思考／施行）が各地域における教育のアプローチとして重視されるとき、子ども＝「生」をとりまく世界はより「生きやすく」なるに違いない。このことを地域に向けたアート活動の指針として刻みたい。（郡司）

註

- 1)・2) 大月ヒロ子・中台澄之・田中浩也・山崎亮・伏見唯『クリエイティブリユース 廃材と循環するモノ・コト・ヒト』millegraph, 2013年
- 3)・4)・5) 秋田喜代美「レッジョ・エミリアの教育学」『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』佐藤学・今井康夫編、東京大学出版会、2003年、pp.73-pp.93
- 6) 佐伯胖「子どもが『アートする』とは—レッジョ・エミリアの幼児教育から学ぶ」『教育美術』2012年9月 (No.843), p.33